The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ペンサムの伝説 その２』
Author(s)	ダイ，ママーング; 松木園，久子
Citation	印度民俗研究. 2020, 19, p. 9-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75706
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ペンサムの伝説　その２』

ママーング・ダイ　著

松木園 久子　訳

寡婦ピンニャール

モナと私が会いに行ったとき、ピンニャールは火のそばで洗濯物を乾かしているところだった。いつもの通り、呪いの言葉をぶつぶつつぶやきながら、濡れた服をバシッ、バシッと怒りを込めて叩きつけていた。ピンニャールは 25 歳にもならないうちに寡婦になった。新しい人生を築きたいと思わせるような、気のいい男と結婚して三ヶ月目のことだった。

それより前に、別の男と 5 年ほど一緒に暮らし、男の子をもうけていた。男はオルカといい、国のはるか北方にある、シユムの山々を越えた村からやって来た。逞しく、目で笑いかける容姿端麗な男で、若いピンニャールは骨抜きにされた。ピンニャールの家族は二人の密通に反対し、あけすけにオルカの氏族はけしからん、厄介者だと言ってはばからなかった。それでもピンニャールを説得することはできず、ある日オルカの子を身ごもったと宣言した。

ピンニャールの家族は年長者を呼び集め、結婚の取り決めと挙式を頼んだ。しかしオルカはこの問題を避け、父親であることは認めたが、子供が生まれて一年もたたないうちに冷酷にもピンニャールを捨て去ろうとしていた。

子どもはカームルと名づけられた。オルカは自分の村へ発つとき、息子だからといってカームルを連れ去った。戻ってくると言いはしたが、帰ってこなかった。ピンニャールは恥辱にうなだれていた。しかし氏族の掟で、不運は彼女ひとりの咎であり、誰にもどうすることもできない、とされたのだった。

何年かが過ぎ、レコンの妻となり、ピンニャールの人生は再び円満に見えた。家族は彼女に、この縁を大切にし、礼儀をわきまえるよう諭したが、結婚してほどないある晩、猟の事故でレコンは撃たれてしまった。

それも 20 年ほど昔のことである。今やピンニャールは一人で暮らし、一日中畑仕事をしている。私たちの村で「畑」とは、木が鬱蒼と生えた山の斜面にまばらに点在する、開けた土地のことで、私の家からは遠く離れていた。野菜や香草を育てるために、どの家もそこに小さな土地を持っているのだ。そこは開けた仕事場になっていて、持ち主には馴染みの場所だ

ったから、朝早くに家を出ると、朝のうちずっと草抜きをしてきれいに整えたり、植え付けをしたりしていた。食べるものを持って行き、陽が中天に昇ったら、藁ぶき屋根の小屋に引き取り、昼飯を食べたり、紅茶をすすりながら火のそばで体を伸ばしたりするのだ。高地の谷間にある、開けた静かな場所でのこんな生活は癖になるもので、人気のない小屋でたびたび夜を明かす村人もいた。それ以外の者は、籠の中にアオトオガラシやカボチャ、ヤムイモやショウガといった収穫物を山積みにして、村への長い帰途に就くのだった。

そんなある晩のことだった。ピンニャールが腕を振りながら、揚々と家に帰っていると、一人の若い男が尋常ではない速さでこちらに走ってくるのが見えた。何か叫んでいるようだったが、よくないことだと察したピンニャールも急いで駆け寄った。そして、聞いたのである。「火事」という言葉を。何てことだ、家が燃え落ちてしまうなんて。

その若者が言うことには、初めは藁ぶき屋根から煙が立ち昇り、それから突如大砲のように竹が爆ぜ、炎が勢いづいて、火花を撒き散らしながら村全体を飲み込もうとしていたそうだ。近くにいた村人が何人か助けに集まったが、役に立たなかった。哀れな寡婦の家はなくなってしまったのだ。

家に火がついたら、不運な家主は村の外れに追放される。それでピンニャールは森の際に自力で小屋を建てた。私とモナが会ったとき、ピンニャールは禁忌の期間をちょうど終えたところだった。禁忌中は、火事を起こす虎の霊魂を怒らせ、家までつけられることがないよう、彼女のもとへ行って食事を共にすることは誰にも許されない。ピンニャールはまだ怒っていた。「火には邪悪な食欲があって、一切合切を飲み込んでしまったんだよ」と私たちに言いながら、濡れた服をまた一枚ビシッとはたいて、乾かしにかかった。「私の運命は呪われてるようだからね！」

ピンニャールは私たちと一緒に腰を下ろして、夫が森で頭を撃ち抜かれたとき彼女が新しい人生の戸口に立っていたことを再び語った。でも、こういったことは起きるものだから、と彼女は言った。「毎年うちらのところじゃ猟の事故で少なくとも三人は亡くなってるよ」

「本当にみんな事故で亡くなっているんですか」とモナは私に尋ねさせたがった。

「死について疑いは全くないよ」とピンニャールは答えた。そして、自分の手を見つめ、しばらく黙っていた。そして、「前はね、ライスビールのためにこの粉をよく作ってたもんだよ。今はもうやらないんだ」と言った。

そうして、そのわけを私たちに語った。昔々ミティ・ミリという不可思議な種族が住んでいた。この小さな、物静かな人々が最初に謎のシイエを作り出したのだ。米を発酵させてビールを作るのに使われる酵母菌のことである。ミティ・ミリの一族は、奇妙な幻覚を見て錯乱し、姿を消す前に、この聖なる粉を人間に与えたのだ。そして、シイエには特別な力があり、丁重に扱うべきものであると強く信じられるようになった。女だけがそれを扱うことを許され、ピンニャールが最上のシイエの生地を作った。その白い粉に米粉と根とベリー類を混ぜ合わせて、小さい平らなビスケット状に形を整えた。「でも猟や旅の前には厳しく禁じられているんだよ」と彼女は言った。「幻覚を起こすからね、ちょうどミティ・ミリ族と同じように。でも決まりを守らない家もあって、それでうちの男たちが森で死んでしまうんだ」

私は驚いた。猟の間に人を撃った人間が人殺しの罪に問われることは非常に珍しい、ということを私は知っていた。銃を放棄し、林へ入って定められた禁忌を守れば、皆が事故だったと容認するものだった。でもピンニャールが今私たちにしたような説明を、ホクソからでさえ、私は一度たりとも聞いたことがなかったのだ。

ピンニャールが寡婦になる原因をつくった男は、もうずい分年をとっていた。ピンニャールは彼をよく知っていたし、村で毎日見かけても、自分の不運を彼のせいだとは思っていなかった。「シイエには悪い霊が潜んでいて、人を気狂いにする」と彼女は言った。「それで不自然な死に方をした人のまぶたにシイエを振りかけて、霊が何かを求めさまよって戻ってこないようにするのさ」

モナと私は黙っていた。ピンニャールは黒い、釣り上がった目で私たちを見つめ、ほほ笑んだ。長く厳しい年月にも関わらず、彼女は痩せて身軽で、男のように髪をとても短く刈り込んでいた。それでも伝統的な慣習は守って、耳が垂れ下がるほどの大きな筒形の耳飾りをして、若い花嫁だったときに初めて身につけた、ビーズや銀貨、お守りをすべてそのままにしていた。

〜

寡婦ピンニャールの苦労話を聞いて、私は果たして女の心が男ほど大きくないものかと考えた。彼女がいかに子どもと夫、そしてついには村の家まで失ったかは誰もが知っていた。しかし、人々が思い出したり、語ったりしたがらない、別の物語があったのだ。

遠くの村で、オルカとの間にできたピンニャールの息子は頑健な若者に育っていた。カームルは立派に身を立てていたのである。役所の事務員だったおかげで、勤めがあるプゴの町でレンガ造りの家に住むことができた。私たちの村出身の素晴らしい女性と結婚し、小さな娘一人と息子二人の父親になっていた。ある日の午後、若い妻は台所にいた。長い髪を幅広の太いロープのように垂らし、肩にタオルを掛けていた。隣の部屋では赤ん坊が低い寝台に寝ており、背後のドアから直に娘を見ることができた。眠っている子供に背を向けたちょうどその瞬間、鋭いシュッという小さな音が聞こえた。振り返ってみると、夫が寝台のそばに立ち、血の付いた刀（ダオ）を握っていた。

彼女はものも言わず、向きを変えると、台所のドアから外に飛び出した。夫は後から追ってきた。

小さな庭の門にはかんぬきがかかっていなかったが、そこまで来たとき、彼女は背中に衝撃を感じた。叫び声をあげ、両隣の家から人が出てくると、夫は刀を落として、おいおいと泣きながら地面に崩れ落ちた。「何が起きたんだ？　何があったというんだ！」彼はたずねた。「俺は何てことをしてしまったんだ！」

誰よりも彼が恐怖に呆然としていた。赤ん坊を殺したことは何も覚えていなかった。それに、裏庭で自転車に乗っていた下の息子にどうやって忍び寄り、切りつけたのかも思い出せなかった。上の息子だけは、学校にいたので無事だった。

カームルは許しを乞うた。悶絶しながら床を転げまわり、あの暗黒の瞬間の記憶がないのだと言った。魔法にかかっていたに違いない、と訴えることしかできなかった。あの恐ろしい時刻、邪悪な霊魂に魂を乗っ取られ、彼は錆びた刀（ダオ）を取り出して、子どもたちと妻に狙いをつけたのだ。妻は下していた髪のおかげで攻撃がそれたが、そうでなければこの世にはいなかったはずだ。

事件を聞いた町の誰もが唾を吐き、口をつぐんだ。この種の出来事にはどんな意味があるのか？　皆が分かっていることは、霊魂と人の世界を分かつのは曖昧な地帯だということだ――実際、人と霊魂はかつて兄弟だったのだから。現実にあるものが幻であり得るし、本当なのはある一瞬について人々が語っている文脈に過ぎないのだ、と皆が知っていた。それでもうろたえていた。

思い起こせば、兆しはあったのだ。その町では少なくとも他に二人が、カームルより前に奇妙な行動をとっており、そのうち一人は自殺した。人々はその場にあった奇妙な木について話した。木の高さにまで育ったナスの苗木のことは覚えていたものの、誰がいつそれを植えたかは誰にも思い出せなかった。それは小さな毒々しい花をつけ、実がなると、丈も長く、大きく膨れ上がっており、おどろおどろしく、つやつやと光っていた。幽霊でも宿っていそうな木で、あえて切り倒そうとする者などいなかった。特に何をするわけでもなく、時ならぬ時刻に木の下にいるカームルの姿が時々見られていた。

ほかの多くの場合にもそうしたように、共同体は分別と秩序を取り戻そうと団結した。カームルはこれ以前に、錯乱状態や精神病的な振る舞いを微塵も見せなかった。あの気の毒な男は、怖がるよりもかわいそうに思うべきだ、と強く言うものもいた。

私たちがその事件のことを聞いたとき、「あの男のせいじゃない。血筋に何かあるのだ」と村の長老たちは言った。「血筋に原因を突き止めることができる男や女がいるんじゃ、歴史の番人のようなもんでの」私たちの村の年寄りは集まって座り込み、氏族の名前や起源、生まれや恋愛や結婚、そして霊魂と幽霊などに考えを巡らせた。結婚の良し悪しや人生の良し悪しを辿れば、いつも血筋の中に何かあると彼らは言った。家系がつづくうちに何らかの形質が急に現れるのだ。それは甥にであったり、叔母や孫の場合もある。その理由は誰にも分らない。

「口に出すのも禁じられている血筋もあるんじゃ」と彼らは言った。「幻覚を見る者たちだ。霊魂に取りつかれておってな、ミティ・ミリのように気狂いの発作に襲われるんじゃ」

寡婦ピンニャールはこの話し合いには加わっていなかったと私は記憶している。久しく会えなかった息子の傍らに急いで向かったのだ。

息子を見るとピンニャールは泣き、町中の怒りから守るため、野良猫のように戦った。カームルは地元警察により鎖でつながれ監禁されていたが、ピンニャールは力のある政治家のサインが入った書類をはためかせながら、つむじ風のように登場した。その書類は、近親者が保護するという条件でカームルの釈放を認めるというものだった。さらに何人も、負傷した妻の家族ですら、処罰を求めることはできない、としていた。時間のかかる複雑な手順だったが、ピンニャールの決意と迅速な行動が息子を救ったのだ。

「さぁ、家に帰ろう」とピンニャールはカームルに言った。「一緒に村へ帰るんだよ」

ピンニャールは彼を連れて私たちの村に帰って来た。そこで彼は妻の家に住み、妻の兄弟や叔父たちに取り囲まれ、監視された。何が起きたのか本当に分かる人はいない、と皆が口を揃えた。真実は、結局のところほんの少ししか存在しないもので、あとはみな、それぞれの感じ方によって異なる言葉遣いの問題なのだ。

私が最もよく耳にした説明では、カームルは大勢の人が押し寄せてくるのを見たということだった。パニックになり必死で銃を探して彼は戸棚を

ひっくり返し、服を引っ張り出し、家の中を右往左往した。これはみな夢だった、というのも彼が立てる物音を聞いたものはいなかったのだから。しかし子どもたちを切り倒すのに使った刀は実際にあった。彼はそれを大きな戸棚の上で見つけた。そこにはへこみがあって、古新聞や紐の塊や古いがらくたなどが被さっていた。

狂気の後、彼は獄中で沈黙に引きこもっていた、ピンニャールがやって来るまでは。「さぁ、家に帰ろう。一緒に村へ帰るんだよ……」と彼女が言うのを聞くと、崩れ落ちた。そして怖がっている子どものように、一息に話し始めた。

「分かってるよ、母さん。僕はどこかおかしいと思ってるんだろ。でもそれは本当じゃない。疲れてるだけなんだ。僕にはここが一番お似合いだよ」そして声をあげて笑った。「この何年もずっとここに座って待っていたんだ、何かが起きるのを。女房に愛情が残っていて、歩み寄ってくれるのを。息子たちが微笑みかけてくれるのを。娘がこの腕に飛び込んでくれるのを。その前は、あんたと父さんを待っていたんだ。母さん、僕は病気になって怖くて震えていたとき、あんたのことを待っていたんだ。皆さん、お忙しいってことだよね、ははは！女房はもう僕を見る目に憎しみがこもっているよ。何かあったんだろうな！昔はあんなに恥ずかしがり屋で、あのつやつやの髪の後ろに隠れていたのに。何かあったんだろうな！息子は僕にけがをさせられると言わんばかりに怖がるんだ。これがどんなにこたえるか、分かりっこないよ。僕の心もみんなに叩きのめされたあの場所に置き去りのまんまだ。もう、おしまいだ。母さんは僕をここから引き離したいんだろ、僕が一人前になった場所なのに！」

彼を連れ帰った後ピンニャールは言った。「息子が邪悪な霊に取りつかれているのは、過去に私たちがある儀式を行わなかったからだ。うちの両親やそのまた両親の過ちだ。もちろん私の過ちでもある。だけどもうやるべきことは分かっている。偉い坊さんたちが揃って悪霊をはらいに来てくれるんだから。私が呼んだんだよ」

一方妻の家の中ではカームルが歩き回っていた。膝をガクンと動かしたり、一人で顔をゆがめたり、笑ったりしていた。心はもはや以前の場所に

はなかった。かつては住む家があった。安全に帰れる場所だった。今では歪んで、見分けもつかない。ただ一枚の絵が目の前に下がっている。血で描いたような絵だ。遠くでわめく子どもたちの声で耳鳴りがする。

「自分のやったことを見てるみろ！自分のやったことを見てみろ、お前は子孫に呪いをかけたんだ」

「でもそれは僕じゃなかったんだ」彼はべそをかいた。

時には怒りで息が詰まり、叫びだすこともあった。「僕はいい子だったのに。何が起きたんだ！一体何が起きたんだよ？」

これが私の聞いたことだ。そして、これらはみな当然ながら推測であり、噂ですらある。明白に私が見ているのは、足の長いピンニャールが家のベランダに座りながら、川向こうから有能な僧侶をみんな連れて来て、息子に取りつている霊魂を追い払うんだと言っていることだけだった。

母親の愛情とはどういうものなのか、と私は考えた。オルカに連れ去られた後、カームルは一度か二度ピンニャールに会いに来ていた。それ以前に息子を手元に置いていたのは、たった一年やそこらだった。それでも、怖いもの知らずで口のきついピンニャールが、何年もの間、かつては自分の胸で泣いていた、裸でぐずる子どものことを語るときは泣き崩れるものだった。

「人に見られたら私の肩にくっついて顔を隠すような、そんな恥ずかしがり屋さんだったんだから！」

ピンニャールは心ここにあらずといったようすで何やら奇妙にほほ笑むようになったと、今では囁かれている。もし私が息子のことを尋ねていたら、彼女はどんな罪からも息子を助け出すために、ありとあらゆる言葉を駆使する心づもりがあったに違いない。カームル自身は二度と発作を起こすことはなかった。今や別の場所に暮らしていて、妻も彼についていった。ピンニャールが便りをもらうことは滅多になかった。カームルの生き残った息子はもうがっしりとした若者になり、学校を退学して、仕事を探していた。誰も過去のことには触れなかった。

森の際にある小屋で最後に私がピンニャールに会ったとき、彼女は嫁に持って行ってくれと古いネックレスを私に渡した。私は随分旅をしている

から、きっと息子が住んでいる町を通るだろう、と彼女は言った。布で包んだ小さな包みをほどいて、虎と猪の歯が結わえてある古い銀貨を私に見せた。おそらく幸運や成功の象徴なのだろう。ピンニャール自身は不確かだった。分かっているのはただそれを持っていれば縁起がいいということだけだった。「信心がすべてだよ」と彼女は言った。

雨の季節に思い起こす、小さな歴史の数々
夢のなかで身内の人々が言っている。木のてっぺんに雨の母がいて、霧の中で笑っているのが見える、と。
　風に乗り、剣を振るうと、身につけた銀の飾りが鳴る。
　くるくる回ってスカートを翻すたびに、黒く縁取られた嵐の雲があっという間に彼女を覆い隠してしまう。

　「間もなく洪水の季節よ」と私はモナに言った。「あなたをグゥドゥムへ連れて戻らなければ」
　不吉な波のように、日ごとにますます低く雲が立ち込めていくのが分かった。山は青く、その輪郭は黒く縁どられていて、木々は静まっていた。まもなく最初の大きな雨粒が野生のヤムイモの巨大な葉を切り裂くだろう。そして、猛烈な雨が、ザーッと音を立てて大地を海のように覆うだろう。
　そんなときには、天が大地のすぐそばを掠めるように見えるものだ。この交わりによって生じた野生の果実は、未知の科に属し、ほろ苦く、またピリッと刺激があり、しばしば不格好で頑丈だったり、あるいは膨らんで不自然な大きさにまでなったりする。山に隠され、炭色の空に覆われた森と川は、生存をかけた壮絶な戦場と化す。菌褶（きんしゅう）を持つ、驚くべき植物が群をつくって芽を出す。柔らかな緑の若芽が開き、刺毛のある、化け物のような扇や傘に姿を変える。野生のベリーは蟻がたかって、見えなくなってしまう。アルマジロのミニチュア版のような虫たちがどこからともなく現れ、きびきびと動き回っているが、エニシダに引っかかると、くしゃっと小さなボールに変身し、それを緑のヘッドライトが保護している。

日中雨が降り、一晩中雨が降る。ときには 62 日間絶え間なく降ることもある。太陽は顔を見せない。風もそよとも吹かない。夏が来るたび、山に張りつき絡まった下草は土砂降りの雨に洗い流され、地滑りが起きて一切の通信も接続も遮断されるのだ。

「この山々はいったいどうしたんだ？」業を煮やした村人たちが言う。

「腹下しの呪文をかけられたんだな！」

「何て天気だ！ひどいところだよ！」

しかし、モナは至って満足げに見えた。「不思議だけど、この場所に惹きつけられるみたい」彼女は言った。「もっといられないかしら？」

〜

おそらく土地の霊魂のせいだ、よく分からないが。訪れる者が忘れてしまった、ものごとの新しさに引き込むようなところが村にはあるのだと、私は帰郷のたびに気づいていた。それは、ものごとがこうなっていたかもしれないという感覚であり、そしてもはやそんな風にはならないのはなぜかというお告げを急に受けるようなものだった。とりわけホクソのような人と一緒にいると、これが当てはまるのだった。

しかしそれは、私たちの土地が変化にさらされなかったとか、ごく最近変化が訪れたということではない。最初の白人の僧侶、測量士、そして兵士はおよそ 200 年前、1800 年代初頭にこの地域に到来するようになった。それ以来よその世界から人々が行き来したが、その旅の唯一の記録は年老いた男女が覚えている物語だけだった。

ホクソが発見されたとき、すでに混乱した、不安定な変化の時代になっていた。ホクソは、父が自分を家に連れ帰るのに使った古い籠が壁につるしてあった、家の一角を指さした。それはリュックサックのようなしょい子だった。かつては、どこへ出かけるにも必ず持って行ったもので、ナイフと塩の小さな包みと火打石のほかにはほとんど何も入らなかった。そのしょい子は布と古い刀に隠れて一部が見えなかったが、黒くすすけていてもまだ頑丈で、籐のもともとの網目は時とともにつやが出ていたが、壊れ

てはいなかった。この籠に入れられ、森を通って連れてこられた赤ん坊の頃のホクソのことを私は想像してみた。赤ん坊があんなところにおさまっていられるかしら？　道中ずっと眠っていたのかしら？　泣かなかったのかしら？　どこからやって来たのかしら？

「あの子は空から落ちてきたんだ」とラークトの父は言ったものだ。みんなが彼を信じたのは、彼が年長者であり、ホクソの父が男の子を背負って帰って来たその土地に一緒に行っていたからだった。

当時村人は、二人が行った場所については、ぼんやりとしか分かっていなかった。知っていたのは、はるか東の方で常緑樹の林の中に大きな洞穴があり、山の斜面から道路が掘り出されている、ということだった。村に届いた知らせでは、白人たちが世界中を通り抜けるトンネルを掘っているとのことだった。彼らはこの仕事に手助けが必要で、さまざまな山の部族から人夫が集団で駆り出されていた。

「働き手に加わるように、わしらの村々から屈強な男たちを説得するのが、村の長老たちの役目だった」とホクソは説明した。「あの頃皆が感じていたことは、長老たちは白人に洗脳されておる。何てことだ！自分たちの子どもに知らない土地へ行って地面を掘り、虫けらのように死ね、などと言うとは。誰もが戦争の恐ろしい話を聞いていた。白人は日本と戦い、大地にも空にも炎が荒れ狂っていたと」

白人にはいろんな種類があり、中には翼の生えたものもいると言われていた。アメリカという大きな国から来たのはよく大声を出し、ビリティッスとかいう最初の白人よりも恐ろしい。しかし、敵に対抗して軍隊が行進するための大きな道路をつくることに関しては、結束していた。

山から集められた男たちには配給品と布団が与えられたが、仕事は悪魔の所業だった。行って帰って来た者たちは、森も空も見たこともないようすだったと言った。白人は恐ろしいほどの活力と決意を持っていた。暴雨や腰まで埋まるようなぬかるみの中で、象を操って川を渡り、丸太を運び出し、林を踏みならしていった。象は象使いの叫び声に合わせて、踏ん張り、震えていたのだが、すべってはもがき、膝をついてはまたもがき続けた。そしてかわいそうにたくさんの象が足場を失い、天を仰いで目をぐる

ぐる回しながら、神話の獣のように喚いて、山肌に突進するのだった。想像もつかないことだ、白人が成し遂げようとしていることは。谷間の湿地で男たちは熱と恐怖に震えながら、蠅のように死んでいった。悪臭のする泥の中を取りつかれた動物のようにもがいているうちに、息が切れ、ゼイゼイといいながら、死ぬ白人もいた。

ホクソの父は当初人夫集めに反対しており、ほとんどの人が彼の側についた。ラークトの父に対する敵意は燃え上がった。というのも彼はイギリス人の旦那たちにとって地元の通訳人だったため、自分の村から少なくとも三人は道路の仕事に送り込むように指示されていたのだ。しかし結局は二人一緒に村を代表して出発することになった。村はその時すでに若い男の方が女よりも少なかった。二人は三年間行ったきりだった。戻ってきたとき、ラークトの父は狩猟用のブーツと上下一式の迷彩服を身につけていた。村に入るとき最初にしたことは、敬礼と満面の笑みをたたえて、「A！B！C！」と叫ぶことだった。幸せな一日で、村人たちは彼らの帰宅を歓迎しようとどっと出てきたのだ。籠に入った赤ん坊についても大騒ぎになっていたが、ホクソの父は何も言わなかった。村人たちがラークトの父に尋ねても、「なんと子どもだったんだ。空でものすごい音がして火が出ると、我らが息子が大地に落ちてきたんだ」と言うだけだった。

何年もたってから当時のことを思い出しても、貨物トラックとブルドーザーの轟音や男たちの叫び声、山の頂上が爆破されて林が火を吹き出す場面や、人夫たちが瓦礫を掻き分け、切り刻まれた山に通るひどい道をやっとの思いで進んでいくようすをラークトの父は生き生きと語って聞かせるのだった。

図書館で読んだものから、これが巨大なヘビのように三ヶ国をまたいで、千マイル以上も曲がりくねりながらアジアを通る、名高くそして謎に包まれたシットウェル街道だということが分かった。アッサムのレドを起点に、私たちの領土を通過し、パットコイ丘陵を超えてミャンマーに入り、そして中国のユーナン省へ至る。この道はマルコ・ポーロやチンギス・ハンが使ったいにしえの踏み分け道を辿ったものである。山を登り、峡谷に落下

し、十の河川と何百もの小川を越えて進む。これほど人的代償を要した道は世界に類がなく、「１マイルごとに１人の道」と称された。

「望みを叶えるストゥーパと黄金の目の寺院がこの経路上にあるんだけどね」と私はモナに言った。彼女がこれらの土地へのトレッキングを手配してくれるようにもっていけないか、などと考え始めていた。そうなれば、私は後についていくだけで済む。道は今もまだ存在し、それも私たちが住んでいるところからそう遠くはないと分かっていた。大きな川を渡って、車で一日行けば到着する。この道を進めば不帰の湖を通過することになる。第二次大戦中にヒマラヤ山脈（ハンブ）上空を飛んだ多くの航空兵が命を落としたところだ。東南アジアを横断しつつ、人里離れた静寂な松の山々を越え、繁栄を誇る豊かな都市へと私たちを連れて行ってくれるだろう。

しかし、私が考えているような道はもうすっかり廃れてしまい、どこにも辿りつけないだろうとホクソは言った。「忘れ去られた道だ。密林と蚊しかない」と彼は言った。「村などない。主のない土地で、今そこに住んでいるのは銃を持った奴らだけだ」テロリストの野営地と移動を続ける反乱軍のことを言っていたのだろう。彼らがこのルートをインドとミャンマーの間の安全な通り道として使用していることは伝えられていた。私はホクソがなぜこんなことを全て知っているのだろうと不思議だった。しかし、彼はそういう人なのだ。結論らしいことは何も言わないが、突然、今しがたのように、何でも頭の中に入っていて、人が言ったことを深く考え続けていることに気づかされるのだ。

この話を私はモナにした。彼は謎だと私は言い、彼が知っていること、そしてなぜ知っているかを教えてくれたらいいのにと思うことがあった。たとえば、彼はどこからやって来たのか、とか。しかしモナに言われて、私は驚いた。「でも、何でもかんでも理解しなければいけないと思うのはどうして？　世界中にもっと奇妙なことは起こっているのよ。そっとしておけば」

〜

ジュールズが到着した。借りたジープに乗って来たのだが、さまよう蛍のように夜には光が点々としかない山々の中で、これほど深い碗状の場所を見つけ出した、自分の大冒険に驚嘆していた。彼が使っていた地図のどれにも載っていない場所だ。しかしそれでも、ジュールズはアマゾンの密林の中であっても地理に明るく、そこからデータを取って出て来て、西洋の大都市で行われる会議で演説をしたのだ。

彼はテントと缶詰の食品を持ってきていた。そして、川辺の白い砂を踏み固めた一画にモナを連れて行った。自然を謳歌する一番の方法はその一部になることだ、と彼は言った。そこで私は彼らのキャンプに二晩同宿した。流木に灯した火が闇の中の小さな光の一点だった。川は目には見えなかったが、頭の中で鳴り響く、聞きなれた、いつも変わらない歌のように、耳には聞こえていた。涼しく、静穏だ。ジュールズはとっておきのワインのコルクを抜き、私たちはパテとチーズと缶詰めの酢漬けのオリーブを食べた。

「ここは楽園だ」とジュールズは言った。「こういうことは、もっとたくさんやらないとね」

モナは伸びをして、火のそばで頬が赤らんでいた。

翌朝ホクソに会いに村に入っていったとき、ジュールズは森林保護のために草の根レベルの計画を実行することがいかに大切かを話した。無垢で正直な森の民に関する話を全て鵜呑みにしているわけではないと彼は言った。心配しているのは、私たちが自分たちの持っているものの価値が分かっていないことと、わずかばかりの金を持って森を滅ぼそうと企んでいる相手に、私たちが何でもかんでも売り払いたがっているように見えるということだった。

そしてホクソは私たちに語った。昔々、寛容で公正な掟のもとに、緑豊かな、人の手が入っていない土地があった。年老いた長たちは、神々に近しいという理由で敬われていた。盗みや人殺しをする者はおらず、誰もが長の住居がある囲いの中まで来れば、自動的にあらゆる危険から守られた。諍いが起これば、長たちは天を見上げ、聖なる火を仰ぎ、霊魂に話しかけた。すると、正義が現れるのだった。食物の種をまき、収穫し、蓄え、公

平に分配する。それが、氏族というものだった。父と息子は先祖の足跡に続いた。

しかし大樹が切り倒された。その高い秘密の場所に宿っていた私たちの祖先の魂も、樹々とともに倒れてしまった。家を失ったので、去ってしまった。そしてそのときから全てが変わってしまったのだ。森の天蓋という安息の場所と伝統が絶えてしまった。風と日差しで私たちの顔はひりひり痛んだ。遠くで、見覚えのない、新しい光がちらちら光っていた。私たちの足跡は、未知の道に私たちを進ませた。もっと欲しくなった。突然、もっとということを知るようになった。粗末な家とひびの入った炉床の先に、もっとがあった。かつてはそこで、私たちは囁き合ったり、自家製の良質なビールを飲んだりして、夢を紛らわせていたというのに。

この話をした時のホクソは穏やかだった。今起こっていることについてジュールズに同意したが、人生にはそれなりの歩調があるのだと彼は言った。何事も、よきにつけあしきにつけ、避けられないのだ。「変化に対峙するには勇気と信念が必要だ。私たちにできることはそれだけだ」

ジュールズは首を振った。しかし、考え続けていた。

そして私は視界の端に、ラークトがこちらへ向かってくるのが見えた。新来者に会うのにいつもそうするように、ジュールズに会うために人々が集まってきていた。村の子どもたちはうろうろしながら、パチンコを振り回し、注目されたい一心で無意味に音をたてていた。ラークトは斜めに進む独特の歩き方で近づき、片手は意気揚々と振っていたが、もう一方の手は脇にしっかりとくっつけていた。

「エッヘン！」彼は言い、脇の下からラム酒の瓶を取り出した。そして、「やぁ、兄弟！やぁ、友よ！」当然みんなに向けてこう言うと、女たち、寡婦や老婆たちも笑った。ジュールズも笑った。彼はくつろいでいて、人懐こかった。ラークトとホクソとラム酒を酌み交わし、出されたものは全て食べた。

「ジュールズは人気者ね」と私はモナに言った。

「まぁ、彼ったら！誰とでもうまくやっていけるのよ。どこへ行かされても打ち解ける。そういう人なの」と笑った。すっかり惚れ直した、ということか。

日が沈み、星がすっかり出てきた。無限という、めまいがしそうな考えや物事の永遠性などといったことを究めようとする人々も、外に出てきた。ホクソとラークトがジュールズに話しかけるのを見ていると、彼らも世界のどこに連れていかれても、誰とでもうまくやっていくだろうと私は感じた。そういう人たちなのだ。

使用テキスト
Dai, Mamang 2006. *The Legends of Pensam.* New Delhi: Penguin Books.

前号に引き続き、ママーング・ダイ著の短編集『ペンサムの伝説』より 2 編の物語を訳出した。これで、同書の「世界の日誌―私たちの血に刻まれた長い旅―」と題されたパートを完了したことになるが、続くパートにも同じ人物や後日談が見られるので、さらに作品の世界に親しみつつ、翻訳を継続したい。今回もまた、快く質問に答えて下さったママーング・ダイ氏に心から感謝申し上げます。

❀

最後に、昨年亡くなられた恩師マーラヴィーヤ先生の思い出のひとつを記しておきたいと思います。先生は、私にとって初めて「生」で見るインド人で、その哲学者然とした風貌に圧倒されました。先生の知識、教養は異次元でした。恥を捨てて、もっと貪欲に学ぶ勇気を持てていたらと今さらながら後悔しています。

そんななか、忘れられない先生の言葉があります。たしか授業中、電車でお年寄りに席を譲るかどうかという話題のときでした。曰く、「知らない誰かに親切にすれば、自分の両親も知らない誰かに親切にしてもらえるものだ」。今までも、そしてこれからも何度も思い出し、襟を正してくれる教えです。マーラヴィーヤ先生、本当にありがとうございました。